東京に生れて

芥川龍之介

変化の激しい都会

僕に東京の印象を話せといふのは無理である。何故といへば、或る印象を得るためには、印象するものと、印象されるものとの間に、或る新鮮さがなければならない。ところが、僕は東京に生れ、東京に育ち、東京に住んでゐる。だから、東京に対する神経は麻痺し切つてゐるといつてもいゝ。従つて、東京の印象といふやうなことは、殆ど話すことがないのである。

しかし、こゝに幸せなことは、東京は変化の激しい都会である。例へばつい半年ほど前には、石の擬宝珠のあつた京橋も、このごろでは、西洋風の橋に変つて

ゐる。そのために、東京の印象といふやうなものが、多少は話せないわけでもない。殊に、僕の如き出不精なものは、それだけ変化にも驚き易いから、幾分か話すたねも殖えるわけである。

住み心地のよくないところ

大体にいへば、今の東京はあまり住み心地のいゝところではない。例へば、大川にしても、僕が子供の時分には、まだ百本杭もあつたし、中洲界隈は一面の蘆原だつたが、もう今では如何にも都会の川らしい、ごみ〳〵したものに変つてしまつた。殊にこの頃出来る

アメリカ式の大建築は、どこにあるのも見にくいものゝみである。その外、電車、カフエー、並木、自働（ママ）車、何（いず）れもあまり感心するものはない。
しかし、さういふ不愉快な町中でも、一寸した硝子（ガラス）窓の光とか、建物の軒蛇腹（のきじゃばら）の影とかに、美しい感じを見出すことが、まあ、僕などはこんなところにも都会らしい美しさを感じなければ外に安住するところはない。

広重の情趣

尤（もっと）も、今の東京にも、昔の錦絵にあるやうな景色は

全然なくなつてしまつたわけではない。僕は或る夏の暮れ方、本所の一の橋のそばの共同便所へ入つた。その便所を出て見ると、雨がぽつ〳〵降り出してゐた。その時、一の橋とたてがはの川の色とは、そつくり広重だつたといつてもいゝ。しかし、さういふ景色に打突(ぶつ)かることは、まあ、非常に稀だらうと思ふ。

郊外の感じ

序(つい)でに郊外のことを言へば、概して、郊外は嫌ひである。嫌ひな理由の第一は、妙に宿場じみ、新開地じみた町の感じや、所謂(いわゆる)武蔵野が見えたりして、安直な

センチメンタリズムが厭なのである。さういふものゝ僕の住んでゐる田端もやはり東京の郊外である。だから、あんまり愉快ではない。

底本：「心にふるさとがある17　わが町わが村（東日本）」作品社
１９９８（平成10）年４月25日第1刷発行
※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。
入力：浦山敦子
校正：門田裕志、小林繁雄
２００６年1月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。